

ニワトリの獣医師と呼ばれたくて 19

～一懸命から一生懸命へ～



白田 一敏

アメリカ初体験 ―後編―

ロサンゼルスに到着。飛行機から

降りると、其処が異国であることを否応なく実感させられた。行き交う人々（人種）、言葉、案内板や建物の雰囲気。とにかくすべてが違う。四方からナチュラルスピードで会話される英語が聞こえてきた。一、二単語しか聞き取れない。これでは手も足も出ない。

空港を出ると、車によるアクセスは非常に良い印象だ。一般車両はもろろんのこと、ホテル専用のシャトルバス、タクシー、レンタカーなどが、軽に空港まで乗り込める。さすが、車社会の国だ。

我々はレンタカー乗り場までバスに乗った。このバスがやたらデカイ。しかも相撲取りのような体格をした女性が運転。スタイル抜群の金

髪女性の成れの果てか!?

時差ボケ解消とスケジュール調整のため、筆者らは市街地に向かった。こちらは右側通行。最初違和感があるが、少しの時間で慣れる。フリーウェイを走ると、アメ車に混

じって日本製の車も多数走っている。日本車は燃費がよいので大人気とのこと。しばらく走ったところで、丘の斜面に『ハリウッド』の文字。そして、チャイナタウン、ユニバーサルスタジオ。かつてテレビで見たような風景が其処にあった。

とにかく、すべてのスケールがデカイ。まさに、『ジス・イズ・アメリカ』。五感で感じるすべてのものが新鮮だった。時差ボケなど全く感じない。

カリフォルニアのタマゴ

筆者らは第一の目的地であるカリフォルニア大学エクステンションサービス(D教授の研究室を訪問した。目的は、アメリカ西部の養鶏場

帯における経営歴史の長い養鶏場(五〇万羽規模)の経営実態調査と、スーパーマーケットのテーブルエッグの卵質調査だ。特にマーケッ

トのタマゴの品質は興味深い。

ドクターKの話によると、前回渡米した際にスーパーからタマゴを購入して割ったところ、予想以上に卵質が悪い印象だったらしい。しかし残念なことに、その時には計測器材を持ち合わせていなかったため、卵質を数値で捉えられなかったとのこと。

「そうだったのか…」

重い卵質検査器材をアメリカまで持ち込んだ意味がわかった。なるほど興味深いテーマだ、と納得した筆者であった。

スーパーでタマゴを大量に買い込み、D教授の研究室に持ち込んだ。加えて、訪問した養鶏場からも原料卵を譲っていただき、検査に供した。

さあ、いよいよ卵質検査実施だ。

「まず、卵重とパック中の汚破卵数を調べよう」とドクターK。

アメリカのタマゴは、クッション材に使うような紙製のパック(モウルドパック)で包装されているため、パックの外から一見ただけではタマゴの様子は見えない。まず、市販のタマゴから調べた。

「タマゴの大きさは一回りぐらい

小さいですね」

「アメリカのサイズ規格は日本と違うのだよ」

「この銘柄は、一〇個中二個も割れていますよ」と筆者。

「このパックは(破卵が)三個もあるよ」とK本部長。

「結構、酷いね。これでは日本では大騒ぎだな」とT社長。

次に、卵内容を調べた。

「君は卵を割って!!」と筆者に指示するドクターK。

「調べた後は、タマゴは何処に捨てましょうか?」

「殻を別に分けて、トイレに流せばよいよ」

「大丈夫ですか?」

「食べてから流すか、食べる前に流すかの差だろ」

「承知しました」

さらに、検査は続く。

「殻の強度は悪いですね」

「黄味の色は、薄くないですか?」

「これがトウモロコシ本来の色だよ」

「卵白高が低いですね」

卵質のあまりの悪さにみんな驚いた。マーケットにおけるタマゴの品質が悪いという事実が次第に明らか

になってくるに従って、傍で高みの見物を決め込んでいたD教授の顔つきが急変した。

D教授もこの事態を予測していなかったのであろう。この事実にだんだん興奮してきた。

「農場から譲っていたいたタマゴはどうだろうか?」

「全く問題ないようですね」

「流通段階で何か問題が潜んでいる可能性が高いわ」等々。

実際にタマゴを割って見なければ実感できないことばかりだった。それぐらいカリフォルニアでの卵質検査の結果は非常に衝撃的なものであった。以来、PPQCでは海外出張に行く機会があれば、可能を限りマーケットや農場のタマゴの品質を調べている。

後日談だが、テーブルエッグの中に破卵が多かった原因は、開閉自由のモウルドバックで包装されているため、消費者自身が購入時に不良品を良品に入れ替えるケースがある、ということだった。

もう一つの後日談は、我々がこの時行った現地調査を契機に、アメリカカ本上六州におけるテーブルエッグの卵質調査をD教授が中心となって

実施したとのことだ。その結果、公的機関からその研究に対して表彰されたという。二年後に彼の研究室を再度訪問した時に、そのことを嬉しそうに話して下さった。

人種差別

このような利害関係を超えた付き合いがプライベートレベルで世界に広がっていく、とても素晴らしい経験をしたものだ。

カリフォルニアを後にして、シカゴに移動した。日本で大流行した鶏種の供給元を訪ね、デイスカッシュンすることが目的らしい。

シカゴに到着。同じ国なのに飛行機で五時間ほどの移動が必要だった。加えて時差がある。改めてスケールの広さを感じた。

街の雰囲気もロサンゼルスと異なる。陽気なロスに比べて、シカゴはやや暗く、治安が少し悪そうだった。

「ステーキでも食べに行きますか?」

「いいですね」

「シカゴでステーキといえは、あのレストランが一番という名店を案内しますよ」とT社長。

海外経験が豊富なT社長の案内で、ステーキの名店で食事することになった。

レストランに入ると、「We have a reservation. My name is...」といった具合に、流暢な英語でレストランのスタッフに話しかけるT社長。

対応したスタッフが我々をテーブルまで案内した。

『どんな美味しいステーキが食べられるのだろう』と期待した。しかし何故か、ドクターKとT社長はともに無言で惘然とした様子。何か様子がおかしい。

「どうしたのですか?」

「出ますか?」と極めて不機嫌な表情のT社長。

「出よう」と即答し、席を立とうとしたドクターK。

一体何が起こったのが把握できない。T社長はウェイターを呼び、惘然とした口調で何かを話した。

しばらくすると、我々は別室のテーブルに案内された。依然として筆

者は何が起こったのか、理解できない。

「どうしたのですか?」

再度同じ質問をした。

「なめられたのサ」と

T社長。

「????」

誰か何か失礼があったのか? 状況を直ちに理解できない。

「簡単に言うと人種差別を受けたわけだ。先程案内されたテーブルは庶民向けだ。周りには黒人などが多かっただろう。気が付かなかったかい? 日本人は有色人種で、かつ文句を言わない輩が多いから甘く見られたわけだ。後ろにいる他の客を見てごらん。リッチそうな白人ばかりだろう」とドクターKが教えて下さった。

確かに言われてみれば、部屋の雰囲気は全く異なっていたことにやっとな気がした。先の部

屋は騒がしく、狭い場所に無理やり押し込められた感じだった。それに比べてこちらは…。歴然とした違いだ。

「常に毅然とした態度が必要だ。特に外国では、意思表示はハッキリすべきなのさ」とT社長がご教示下さった。ドクターKやT社長から説明を受けて、人種差別を初めて経験したことをやっと理解できた。

多くの日本人はこの種の無礼を甘んじて受けるケースが多いらしい。良くも悪しくも我慢強いのもかもしれない。また、英語に対するコンプレックスもあるだろう。

しかし、そんな甘えは許されない。常に毅然とした態度で意思表示することが、世界の人々と対等に渡り合う最低条件であることを実感した事件であった。

今夏、オリンピックで金メダルを勝ち取った日本人選手が多数現われた。メダリストの共通点は、強固な意志、自信ならびに誇り（＝毅然とした態度で意思表示できる）に満ち溢れていることではなからうか？彼らを見ていると、若い世代を中心に典型的な日本人の個性の悪しき部分が変化し始めている気がする。

コーンベルト

シカゴからミネアポリスに移動。

ミネアポリスはアメリカの穀倉地帯を代表する都市で、何処となく牧歌的な雰囲気だ。空港には、ドクターKの友人で、栄養学が専門のB博士が迎えに来て下さった。

農場に向かう途中、車窓から広がる風景は一面のトウモロコシ畑。畑は遙か遠くまで続き、そのうち地平線となる。地平線に太陽が沈む。感動!! これほど広大な地平線を見るのは初めてだった。

さらに車を走らせたなら、コーンベルトの真つ只中に鶏舎出現。一棟に一〇万羽近く収容できる鶏舎が十数棟立ち並んでいた。鶏舎内に入ると内部設備は日本と大差なかった。

違いといえば、基礎の土台部分であろう。こちらでは高床式鶏舎の土台は木造であった。その土台は古いもので二十五年以上も使用されているとのこと。

「俺が生まれた頃に建てられたのか」。しきりに感心した。その頃日本の養鶏は庭先養鶏から発展し始めた頃であり、育成舎が青空鶏舎、

成鶏舎は掘立て小屋に近いものだった。そのように連想すると、いかに凄いかが理解できる。

アメリカでは、ケージなどの内部施設が傷めば土台を残して内部改造するらしい。湿度の高い日本では、簡単には真似できない。

さらに印象的であったことは、農場の近くに穀物を運ぶための鉄道や飼料工場が隣接していたことであつた。自社で飼料工場まで保有して養鶏経営を営むケースが多いという。この地域の養鶏場はコーンベルトの恩恵を最大限に受け、飼料原料が安価に入手できる境遇であるため、鶏卵生産において極めて優位に事業展開できる。

最近、ビジネス情報誌にフードマイレージという言葉が紹介された。この言葉の概念は輸入重量と輸送距離を乗じたものと定義されていた。また、この情報誌では「マグロをジェット機で二万キロも運んで日本人は食べている（＝フードマイレージが高い）」と具体的に説明されていた。

この概念を参考にすると、養鶏産業は原料である飼料（トウモロコシ）、ニワトリ、鶏舎などのハードなどを欧米から輸入して成り立っている。それぞれの資材が海を渡って日本まで運ばれている（＝マイレージが高い）のが現状だ。

このコンセプトに倣えば、タマゴはフードマイレージが高い食品といえる。つまりマグロと同じように、日本のタマゴはもっと高値で売買されてもよい食品だ、と言えよう。卵価が回復してきたとはいえ、本来の適正価格とはまだかけ離れていると思えることは非常に残念である。

逆に視点を変えると、コーンベルトの真ん中で養鶏業を営むことは移動距離が少ないのだからマイレージは極めて低い。つまり、究極の優位性を持つということになる。

アメリカのコーンベルトで見た採卵養鶏の懐の深さは、この優位性に起因するのかもしれない。そう実感できた、貴重なアメリカ初経験となつた。

筆者：(株)ピーピーキューシー

品質管理&生産管理部門長
獣医学博士／獣医師